新 今昔物語

第7話

市の指定文化財⑦ 戸口装置

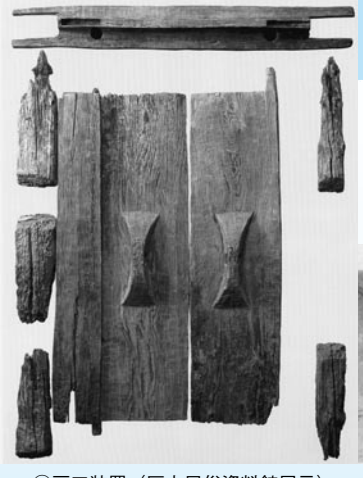
JR四条畷駅の西側に大阪府営北新町住宅がありますが、この辺りは縄文時代から近世までの複合遺跡である北新町遺跡で、昭和62年（1987）、住宅建て替え工事に伴う発掘調査により出土しました。

古墳時代中期前半と考えられる井戸の井筒に転用されていたもので、取り上げた結果、戸口（建物の出入り口）のほとんどを構成するもので、マツ科の常緑針葉樹であるモミ材が使用され、表面には手斧で削られた痕跡が明瞭に残されていました。

写真①の中央の長さ約1・4メートル、幅約0・4メートル、厚さ約4センチの「扉板」が2点、上部の「楣」（出入り口の扉の上に渡した横木）が1点、「小脇板」（扉板の両側に据え付ける薄い板材）が1点、そして「方立」（扉の両側に付けた厚い竪板）と考えられる部材の5点が確認され、「蹴放」（出入り口の扉の下にあって、内外のしきりをなす溝のない敷居）だけが欠けている状況でした。

弥生時代から古墳時代にかけての戸口の部材は全国で78程度の出土例が確認されていますが、それらは各部材が単独で出土するものであって、このようにほぼ部材のそろった状態で出土したものは全国でも唯一のものと思われます。当時の建築物の戸口を復元する上で大変貴重な実物資料といえます。

（生涯学習課）



①戸口装置（歴史民俗資料館展示）

②戸口部材を井筒にした井戸